

NEWS FID +

CONTENTS

授業レポート

「代謝系理学療法学」理学療法学科 松本 大輔	1
「基礎医学総合演習」看護医療学科 祐實 泰子	2
「栄養教諭論」健康栄養学科 玉井 典子	4
「構造力学Ⅰ」人間環境デザイン学科 吉村 理	5
「教育史」現代教育学科 森岡 伸枝	6
FD研修会レポート	8
2025年度FD活動報告	10

授業レポート

「代謝系理学療法学」

理学療法学科 松本 大輔

代謝系理学療法学の到達目標は、「糖尿病などの内部障害患者に対するリハビリテーションでのリスク管理・運動処方」と「生活習慣病の予防・治療につながる運動・生活指導」ができるようになることとしています。理学療法学科の3回生後期は長期の臨床実習を控えているので、臨床的意義を実感しながら、今までの知識・技術を活用し、実践的な思考力を養うことができるような授業を心がけています。



全15回の授業のうち、外部講師による「がんのリハビリテーション」1回、中盤に理学療法評価に関わる実践演習が2回、まとまった单元ごとに国家試験問題を活用した確認演習など講義だけにはならないような構成としています。研究授業となった第11回のテーマは「糖尿病の合併症(網膜症・腎症)」となりました。私が授業で心がけている点は、以下の通りです。

①アクティブリコール:記憶を定着させるために、冒頭5分で、前回の授業内容を能動的に想起してもらい、アウトプットさせる機会を作っています。まずは資料など何も見ず思い出させ、少しずつキーワードを出していきながら、学生に反応を見て理解度を確認します。



②自主学習の支援:授業はレジュメを用いて進めていますが、試験前にレジュメを覚えるだけの学習パターンにならないように、教科書の該当範囲やオンライン学習ツール(糖尿病ネットの「糖尿病 3 分間ラーニング」)の紹介をし、後で一人でも復習できるように情報提供しています。

③授業ポイントの冒頭での提示:授業終盤に実施するグループディスカッションの課題「合併症を有する糖尿病患者において、高強度の運動を控えるべき理由」を始めに提示しポイントを伝えることで、ただ聞くだけでなく、重要なポイントを意識して考えながら、授業を受けるスタイルをとれるようにしています。

④写真・動画の活用:今回は血液透析が必要な患者さんを通じた実際の医療現場の動画を一緒に見て、臨床の現場をイメージ・理解しやすいように写真や映像を活用しています。

⑤診療報酬との繋がり:近年、糖尿病に関連する足病変や透析予防・透析時の運動指導など理学療法士の関与が算定要件に含まれるようになり、この分野での理学療法士のニーズが高まってきています。その現状を具体的に示すことで、「なぜこの知識が必要なのか」という学習の意義が明確になり、学習内容が将来の臨床業務に直結し、職業的役割と社会的意義を実感してもらえるようにしています。



⑥他科目との繋がり:実は、診療報酬上、合併症のない糖尿病患者さんに対して理学療法が処方されることは少ない状況です。高齢で脳卒中、心疾患や運動器疾患を有する患者さんが糖尿病も有するというケースが多いので、他の科目との繋がり意識して、適宜、説明しています。この点については、私はいくつかの授業補助に入っていた経験があるので、諸先生方の授業内容をある程度把握できている分、その経験が活かしているのではないかと思います。あとは、理学療法学科特有の元気塾があるので、利用者さんの事例を挙げると、より具体的にイメージできるようになります。

⑦質問を頻回に実施:一方通行にならないように、毎回、授業内で5~10名の学生に質問を投げかけています。質問内容は、単純な知識の確認から臨床場面を想定した応用的思考を要するものもあります。「忘れました。」「わかりません。」で逃げないように、わからない場合は質問の難易で下げたり、ヒントを出したり、キーワードが出せるように誘導しています。あるいは、グループ内のメンバーでサポートし合うことも促しています。

⑧グループディスカッション:授業の終盤に冒頭で提示した課題について、グループで内容をまとめたり、意見を出し合ったりしてもらいます。グループ内で意見を出しやすく、特定の学生にエフォートが偏らないように、最大4名までの少人数制にしています。各グループを巡回し、議論の進捗を確認するとともに、全体ではなかなか手を挙げて質問できないようなので、質問を受け付けています。グループから出た質問や気づきは必要に応じて全体に共有しています。

以上のように、講義科目ではありますが、受け身的な授業にならないように、学生が少しでも主体的に参加できるような環境づくりを心掛けています。あとは、理学療法のおもしろさと、理学療法士になる厳しさを知り、その覚悟を持つ一助になればと考えております。今後も授業改善を通じて、社会に貢献できる理学療法士の育成に取り組んでいきたいと思っておりますので、ご指導のほどよろしくお願いいたします。



基礎医学総合演習は、看護学の専門領域に直結する基礎医学の理解を深めることを目的とした、3 回生対象の授業です。すでに1回生と2回生で学習した人体構造機能学、生化学、薬理学、病態医学、看護学の各専門領域などをオムニバス形式で扱い、看護実践に必要な基礎的知識の再確認と応用力の育成を目指しています。

今回の授業では人体構造機能学領域の「内分泌系」をテーマに、事前課題と講義内容を連動させた構成としました。事前課題は、前回の講義内容を振り返る「酸塩基平衡の復習問題」と、今回の講義に関連する「視床下部・下垂体ホルモンの整理」の2つで、学生が1時間以内で取り組める分量に設定しています。講義では、課題で難しかった部分を丁寧に補足し、疾患とのつながりが重要である甲状腺ホルモンと成長ホルモンに焦点を当てて展開しました。研究授業には教職員あわせて30名の方に参観していただきました。



内分泌系は、多くのホルモン名を覚える必要があり、その機能も多岐にわたるため、1回生の頃から苦手意識を持つ学生が多い分野です。3回生として病態医学を履修した時期に再度学習することで、正常な機能の破綻が病気につながることを理解し、興味を持って学ぶことができると考えています。授業では講義内容の理解の確認と整理のために国家試験の過去問を活用しています。緊張感を持ってもらうために確認問題は指名していますが、間違いがあっても否定せず、すぐに正答を重ねて提示するなど、安心して発言できる雰囲気づくりを意識しています。学生は当てられることを想定して課題に取り組んでおり、1回生からの授業経験がその習慣を支えていると考えています。また、学生の集中力を保つために、適宜確認時間を設け、学生同士での確認や頭の整理を促す工夫も取り入れています。この取り組みも1回生の頃から継続しており、理解が難しく孤立感を感じやすい場面での心理的負担を軽減する効果もあると考えています。

授業後の検討会では、授業の進行や学生対応の工夫に対して活発な議論が交わされました。専門科目と基礎科目の連携のあり方など、今後の課題も共有され、専門科目と基礎科目のつながりをより強化し、学生が臨床現場で必要な知識を体系的に身につけられる授業構成の改善、統合的な評価の必要性を考える良い機会になりました。今後も学科内のFDや教務員会等を通して、継続的に検討を重ねていきたいと考えています。

最後に、今回の研究授業および授業検討会にご参加いただいた教職員の皆様、また撮影等にご協力いただいた職員の皆様に、心より感謝申し上げます。

「栄養教諭論」は、栄養教諭資格を希望する健康栄養学科 3 回生前期に開講している選択科目です。

栄養教諭は、2005 年に小・中学校における食育を推進することを目的に学校教育法で定められた教員として創設されました。本学では、管理栄養士資格を基礎とした栄養教諭一種免許を取得することができます。

本科目では、栄養教諭の「児童生徒への栄養指導と学校給食の管理をつかさどる専門職」としてだけでなく学校における食育活動の中心的な役割を担うための企画力、コミュニケーション力を育成するよう以下に示す学修に取り組んでいます



- (1) 栄養教諭の職務内容及びその役割について理解する。
- (2) 学校給食法、学校給食の教育的な意義・役割、学校組織と栄養教諭の位置づけ等について理解し、栄養教諭の役割を十分に踏まえた教育指導について理解する。
- (3) 学校給食の食文化の変遷について理解する。
- (4) 現在の児童・生徒の健康や食生活の実態について理解する。
- (5) 発達に応じた教材や学習方法の選び方を理解し実践できる。
- (6) 学校給食管理・個別対応について理解し、実践できる。
- (7) 食育推進基本計画における学校給食に係る内容・目標値を理解する。

実際に栄養教諭は、食に関する指導として集団指導や児童生徒の肥満、偏食、食物アレルギーなどの健康課題に対して、個別相談指導を行うとともに、学校給食の管理者として給食の献立作成、栄養管理、衛生管理、食材の発注、調理指導、地場産物の活用など、給食に関わる業務全般を担当します。

授業担当者は、栄養教諭として経験してきたことを交えながら、教科書では学べない「実践力育成」に注力し教職員の一人としての「栄養教諭」の役割を理解するだけでなく食育を推進していくための具体的な手法やコミュニケーション力を身に付けられるようテーマごとに「演習・発表」を組み入れながら「教壇に立って指導する」「栄養教諭として指導する」ことをイメージしやすいよう進めています。

本研究授業では栄養教諭が最も取り組みやすい「給食時間における食に関する指導」をテーマに展開しました。今年度の履修生は社会人学生を含む6名と少数です。学校給食を活用するメリット等を講義してから、学生は提示された給食献



立から児童生徒へどのようなメッセージを伝えることができるかを考え発表し意見交換しました。さらに、事前課題として学校給食の献立作成及びその献立に関する校内放送の原稿作成に取り組み、発表するとともに他者の発表に対する感想や改善点をまとめるなど評価し合うことで、学生自身が主体的に学ぶことができたと考えます。

授業担当者として授業を行う上で配慮している事項は以下の通りです。

○授業前に授業資料や課題を提示し、講義だけの一方通行の授業にしない。

○少人数で意見交換がしやすいことを生かして他者の意見を

聞く機会を設け主体的な学修の場を設ける。

○授業担当者の取り組んできた実践例を随所で提供し、分かりやすく臨場感を感じる授業にしている。

研究授業後、参観いただいた先生方から「内容が濃い授業だった」「演習・発表を取り入れた授業が参考になった」との声をいただきました。また、検討会においては「情報量がとても多い授業であった。指導者の経験談を交えることで学生が理解しやすい」等の感想をいただきました。

授業担当者としては多くのことを伝えたい思いが先行し、学生が理解し現場の栄養教諭がイメージできているか、児童生徒を食から支え指導したいという意欲をもてるようになったか等授業の成果が気になるのですが、4月当初栄養教諭志望者が2名であったところから終盤に4名に増えたことで一定の成果があったのではないかと安堵しています。

最後に、この研究授業を通して、授業の運営や学生主体の授業の在り方を再認識することができました。関係の皆様にご感謝申し上げます。

「構造力学Ⅰ」

人間環境デザイン学科 吉村 理

1 回生後期配当科目である「構造力学Ⅰ」は、2 回生前期配当科目である「構造力学Ⅱ」へ繋がる重要な科目で、構造力学の基礎を学びます。構造物に働く力についての基本的な知識及び、構造物を合理的に設計する上で必要な基礎を習得し、特に静定構造物に外力が働いた時に、構造物の各部分および断面に生じる力、力の流れについて理解する事を目標としております。

一級建築士になるためには、国土交通大臣が行う一級建築士試験に合格し、国土交通大臣の免許を受ける必要があります。この試験は、学科試験と設計製図試験に分けて行われますが、学科試験の出題科目に構造力学が含まれます。一級建築士取得を目指す学生にとっても構造力学Ⅰ、Ⅱは非常に重要な科目といえます。

南海トラフ地震の報道等により耐震や構造への認知が高まっており、あわせて近年万博等で構造デザインがクローズアップされてきた事もあり、意匠分野に進む事を目指す学生にとっても構造が身近なものになってきています。しかし数学や、物理の基礎知識を必要とする構造力学に対する苦手意識を持つ学生が多い事も事実です。

そこで、以下 3 つのポイントについて工夫し授業を進めることにしました。1、徹底的に基礎を反復する。2、毎回練習問題プリントを配布し、一緒に手を動かしながら問題を解いていく。3、板書による手書きにより、その時々学生の理解度を確



認しながら柔軟に進め方を変えていく。1 から 3 について少し補足します。



1, 授業の初めには必ず、前回の練習プリントの内容を復習するだけではなく、各問題を解く途中で、過去の問題と関係する内容が出てきた場合は、どのような小さな事でも、必ずその問題に言及し、思い出させるようにしています。それを徹底して行ってきました。

2, 練習問題は毎回回収し、出席の確認も兼ね、取り組みの意欲や理解度を確認しています。学生には、出来る限り赤ペン青ペン等の色ペンを使って、自分で理解しやすいようにオリジナルのプリントを作成する事をすすめています。

3, 上記 2 の内容と関連し、板書は出来る限り色チョークを使って、分かりやすく理解出来るように工夫しています。各自のプリント作成にも参考にしてもらおうようにしています。

これによって、苦手意識を持つ学生も、順を追って丁寧に解き進めていけば、解答に辿り着く達成感を体験し、問題を解く前から難しく出来ないと感じることなく、意欲的に課題に取り組む学生が増えました。後日行われた授業検討会では、授業の進め方について多くの肯定的な意見を頂きました。私が工夫した 3 つのポイントをご理解頂き、大変励みになりました。一方幾つかのご指摘も頂きました。一つは板書による青チョークが遠くから見え

にくい点です。色の選択については見直しをおこなっていかうと思います。一方約 75 名の受講者がおり、教室が広い為、最後尾の席から板書が見えるかどうかについては、問題ありませんでした。二つ目は板書を消すタイミングです。板書の範囲が限られるため、授業中数回消す必要がありありますが、学生にとって消すタイミングが少し早いのでは無いかというご意見でした。黒板範囲が広い教室で授業をした方が良いとのアドバイスを頂きました。三つ目は質問時間を適宜設けた方が良いというご意見です。小問を解く度に質問時間を設けようと思います。

最後になりましたが、お忙しい中今回の研究授業および授業検討会にご参加いただきました教職員のみなさまに、心より御礼申し上げます。

「教育史」

現代教育学科 森岡 伸枝

「教育史」は、1 年次後期に開講される教育学部の選択科目で、第 2 回の講義を教職員の皆様にご覧いただくことになりました。テーマは、本学の歴史とし、創設者冬木智子先生の学校歴としました。具体的には冬木先生の回想録(『生きる』)を読み、冬木先生が学ばれた高等女学校の制度、そして当時のジェンダー規範であった良妻賢母思想を考察しました。その際、教育史学研究的文献を照らし合わせ、研究の疑似体験をしてもらいました。ちなみに、昨年度は 20 名程度の受講生でしたので、戦時期の実物の絵本に触れてもらい、子ども観の分析を手作り新聞で発表する体験型の授業をしておりました。ですが、今年度の受講生は 100 名を超えたことから、全面的に見直しての授業でした。なお「教育史」を意欲的に選択した学生は多くはないことが第 1 回目の授業で判明しておりました。そこで、自分の出身校の歴史を調査する課題を第 1 回の授

業内に提出してもらい、今回のテーマに興味を寄せてもらうようにしました。



また授業では説明に終始することは避け、学生と対話をしながら進めました。具体的には「KIO検定」を作成し、本学の創設者の写真や良妻賢母の中身を選択式で選んでもらいました。座学型の講義は受け身になりがちですので、グループ学習も20分ほど行いました。冬木先生が通われた時期の高等女学校のカリキュラムをグループで分析してもらいました。なお、座席は学籍番号順ではなくランダムに指定し、幼児教育、小学校教育など種別の違う教師を目指す人々が交流し、様々な視点で討論できるようにしました。各グループでは自己紹介から始めてアイスブレイクをした後に話し合ってもらいました。その後、学生達に発表してもらい、私は教育学研究の成果を紹介しながら分析結果を伝えました。

検討会の協議では、講義で本学の歴史を取り扱った背景をご説明しました。第二回の講義のねらいは、いわゆる暗記中心の歴史アレルギーを解決したいという思いと、歴史学は面白いと思ってもらうには研究を疑似体験してもらう事だと思った事をお伝えしました。また、個人的には本学の歴史は私の専門とする女子教育史そのものであると発見した事がきっかけであり、学生の本学への帰属意識をより一層高めたいという気持ちもあった事もお伝えしました。先生方も本学の歴史に誇りを持っておられる事、学生に伝えたいというお気持ちの強いことを感じ、それが私にとって心強いものになりました。その他、学生の学びが活発になるための内発的動機づけの必要性についてご意見を賜りました。



また、学生が出身校の歴史を調べるときの個人情報の扱い方や多様な学校歴の背景に注意をする大切さもご指摘頂き、大変ありがたい学びとなりました。

今回は学会発表10回分といっても過言ではない、最高に緊張する経験でした。私は何を伝えるために授業をするのか、それで学生は何を得ることができるのか、どこで学びはつまらなくなるのか、面白くなるのか、といったことと向き合う機会をいただきました。学部長、学科長、教員の皆さまから励ましのお言葉や感想を頂き、味わったことのない心に残る経験となりました。この機会を設定くださった職員の皆様、そして公開されるという、緊張する講義に出席した学生たちに心から感謝申し上げます。

2025 年度 FD 研修会報告

『多様化する学生への初年次教育について』

2026 年 2 月 12 日(木)14:00 より本学教職員(非常勤講師を含む)を対象とする FD 研修会が開催され、93 名が参加しました。

今年度は「多様化する学生への初年次教育について」をテーマとし、理学療法学科の福本貴彦教授と健康栄養学科の前原佳代子教授にそれぞれ話題提供していただいた後、グループディスカッションを行い、最後にその内容を共有する形式をとりました。

まず福本教授からは、現在ご担当いただいているリメディアル科目「PT への物理」の授業内容が紹介されました。

1 年次配当の「専門準備科目」に当たるこの授業では、初回に独自のプレイズメント・テストが実施されます。テストは大問 5 問で構成され、問 1・2 は理学療法士国家試験の問題から、問 3～問 5 は奈良県公立高校の入試問題から出題されます。この結果を 2 回目の授業で返却し、解説を加えられるのですが、その成績を経年比較してみると、平均点や最低点の推移に比べて最高点の低下傾向が著しくなっています。高校時代に物理を履修していない学生が増加していることも大きな要因と考えられます。



こういった状況の下で国家試験合格、さらには理学療法士として社会で活躍できる人材を育てていくために、先生はさまざまな工夫を凝らしながら授業を運営されています。その中で、特にいま大切だと感じられているのが「社会人基礎力」であると先生は述べられました。

経済産業省が 2006 年に提唱した「社会人基礎力」は「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」の 3 つの要素(さらにそれを細分化した 12 の能力的要素)から構成されており、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」とされています。理学療法士として働く中では、物理の公式だけを知っていても決して答えることができない素朴な疑問や質問に直面する機会が数多くあります。そのような場面に柔軟に対応できる力を養うためには、ただ知識を身につけるだけでは十分ではありません。その知識をどうやってわかりやすく説明するか(伝える能力)が重要となります。

授業では、そのような問題意識から「まず授業を行う」「その内容を物理履修者が説明する」「その後、グループディスカッションで、いま学んでいることをどうやって説明すれば伝わりやすいかを受講生同士で考える」という段階を設定されています。そして子どもから高齢者、あるいはその介助者等、多様なクライアントに対応できる理学療法士としての基盤を形成されようとしています。

とはいえ、学生同士のグループディスカッションが思うように進まなかったり、授業の時間配分が難しくなること、さらにこの科目が「0 単位」の科目であることもあって、なかなか学生が授業に参加してくれない等、悩みは尽きない様子でした。

つづいて前原教授から、こちらも現在ご担当いただいている 1 年次配当の「解剖生理学 I・II」における授業改善の事例が紹介されました。

「解剖生理学 I・II」は管理栄養士養成課程の「専門基礎科目」であり、人体の構造や機能を学びます。1 年次配当という

こともあって大学で必要とされる「主体的な学び」を経験していない受講生が多く、どうしても受講姿勢が受け身になりがちで、試験前にひたすら試験範囲を暗記するだけで通常の授業時には予復習もしない、といった傾向が顕著に見受けられたそうです。そこで先生は、学生の「主体的な学び」を促すために「授業を改善すること」から取り組みを始められました。



先生が着手されたのは、従来の講義中心型の授業から学習者中心型の反転授業への転換でした。OpenCEAS を利用して事前学修(教科書を読む、動画を視聴する、理解したことをまとめる)、対面授業(講義を聞く、グループワークに参加する)、事後学修(新たに学んだことや学び直したこと、疑問や気づきをまとめる)それぞれの段階において必要な学びを自主的に進めるための資料や動画配信リスト、学修チェックリスト等が提示されます。学生はそれらをこなしていくこと

とで、自然に受け身ではない学修サイクルに入っていけるという仕掛けです。

受講者にとっては当然厳しさもありますが、授業アンケートの回答等からは多くの学生がその意図を正しく理解してくれている様子がうかがえること、また、実際に成績評価にもその成果が反映されつつあり、さらに継続的な検証を行っていきたいこと等が述べられました。その一方で、こうした取り組みの効果がなかなか現れにくいケースがあることについても言及されました。学生の基礎的な学力やコミュニケーション力など学びの素地となる部分に変化していることが要因の1つとして挙げられます。科目担当者の手に余るそれらの問題点を解決すべく、現在学科の取り組みとして開講前オリエンテーション時に実施する学科独自の「学びのオリエンテーション」からリメディアル科目「管理栄養士へのベーシックサイエンス」への効果的な接続を図ろうとしていることが紹介されました。さらに学科だけでなく、大学全体でこうした現実を直視し、連携することの必要性にも触れました。いま進められているアクセシビリティ支援やアカデミックスキル推進等は、まさにその一環ということになります。

話題提供の後は、全参加者を10グループに分けてのグループディスカッションを行いました。参加者は各学科の専任教員のみならず有志でご参加いただいた非常勤講師の先生方、そして事務職員まで多岐にわたりましたが、先生方は日頃の授業や担任業務、事務職員は窓口における対応など、それぞれの職掌に応じた場面で感じておられることを中心に、積極的な意見交換がなされました。ここでもやはり「以前に比べて学生の基礎学力の差が大きくなっている」「何事にも受け身の姿勢が目立つ」「グループワーク等の形でコミュニケーションをとることが難しい、苦手と考える学生が増えているのではないか」といったような意見が多く示されていました。



初めて顔を合わせる参加者も多く、多くのグループでは自己紹介からのスタートとなりましたが、短時間ながらも非常に活発なディスカッションとなり、話題提供でもグループワークの際の課題の1つに挙げられた「フリーライダー」の姿はほとんど見られませんでした。

最後に司会者の田平一行教授(理学療法学科、FD・授業改善専門部会長)より指名を受けたいいくつかのグループから意

見交換の内容についての発表がありました。話題提供をいただいたお 2 方の丁寧な授業運営やフィードバックに対する敬意が示されるとともに、卒業後の進路イメージを明確にし、そのために今何が必要かをイメージさせることによって学生のモチベーションを高めることの大切さ等にも言及されました。あるいは、そういった取り組みは時として空振りに終わることもあり、矛盾を感じることも少なからずあるものの、1 つ 1 つ手さぐりでも進めていかなければならないという意見も示されました。

時間の都合上、すべてのグループに発表してもらうことはできませんでしたが、各グループのディスカッション内容は後日、チームサイトにまとめて共有しました。この研修で得られた学びや気づきが、これからの授業運営あるいは本学の教学企画の推進等に生かされることを期待します。

2025 年度 FD 活動報告

前期

- 4 月 1 日 新任教職員研修会
- 6 月 27 日 健康栄養学科 研究授業(「栄養教諭論」玉井 典子)
- 7 月 3 日 看護医療学科 研究授業(「基礎医学総合演習」祐實 泰子)
- 6 月 27 日～前期授業アンケート実施
- 9 月上旬 前期授業アンケート集計結果のフィードバック・授業改善アンケートへの回答依頼

後期

- 10 月 7 日 現代教育学科 研究授業(「教育史」森岡 伸枝)
- 11 月 24 日 人間環境デザイン学科 研究授業(「構造力学 I」吉村 理)
- 11 月 26 日 理学療法学科 研究授業(「代謝系理学療法学」松本 大輔)
- 12 月 17 日～後期授業アンケート実施
- 2 月 12 日 FD 研修会「多様化する学生への初年次教育について」
(理学療法学科 福本 貴彦教授、健康栄養学科 前原 佳代子教授)
- 3 月上旬 後期授業アンケート集計結果のフィードバック・授業改善アンケートへの回答依頼

*2026 年度の研修会等の日程は、決まり次第お知らせいたします。2026 年度も本学の FD 活動に対し、ご理解ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。